



令和7年度

水稻の生育概況 vol.3



埼玉県マスコット

「コバトン」

(令和7年8月8日現在)

埼玉県農業技術研究センター

要 約

◎気象概況：7月の平均気温は平年比 $+3.1^{\circ}\text{C}$ と観測史上最も高く、降水量は平年比74%と少なく、日照時間は平年比166%と多かった。

◎生育状況：早期栽培の生育はほぼ平年並で葉色はやや薄い傾向であった。出穂期は平年より5日程度早くなっている。早植栽培の生育は平年並で葉色はやや薄い傾向となっている。出穂期は平年に比べ2～3日程度早まっている。普通期栽培では生育初期から高温で生育は旺盛となっており幼穂の分化が早まっている。

◎今後取るべき技術対策

- ・水 管 理：出穂前後1週間は深水管理とし、その後は間断かん水を行う。
玄米の品質低下を避けるため、落水は出穂後30日以降に行う。
- ・穂 肥：出穂10日～15日前に葉色を再度確認し、葉色が低下していたら追肥を実施する。
- ・病虫害防除：引き続き斑点米カメムシ類に対する防除対策の徹底が求められる。出穂期が早まることが予想されるため適期防除に努める。
- ・適期収穫：高温登熟により刈取適期が早まると予想される。刈り遅れにより胴割粒の発生が増加することから早めの収穫開始を心掛ける。

1 気象の概況

7月の平均気温は、第3半旬を除いて平年より高く推移し、月平均では平年差 $+3.1^{\circ}\text{C}$ と観測史上第1位となった。降水量は7月10日に日合計89.5mmのまとまった降雨があったものの、第2半旬を除き、平年を下回り、特に第6半旬は無降雨となり、月全体では平年比74%となった。日照時間は、第3半旬を除いて平年より多く推移し、月合計は平年比166%であった。

気象庁の発表によると、関東甲信の梅雨明けは7月18日となり、平年より1日早かった。

2 生育の概況

(1) センター内生育相

ア 早期栽培（5月1日植 コシヒカリ）

高温の継続により葉位の進展や幼穂の伸長が早く、出穂期は平年より5日早まり、主稈総葉数はおおむね平年並となった。また、出穂始から穂揃期までに11日を要した。これは6月第4半旬～7月第2半旬までの著しい高温により、幼穂の伸長が極端に早まった個体が見られたことに加え、第3半旬の気温が平

年並に推移したことにより、それまでの高温による生育の前進化が一時的に抑制されたことや寡照による生育停滞の影響によるものと考えられた。

イ 早植栽培（5月20日植 彩のかがやき）

移植後50日以降の生育も、茎数、葉位は依然として平年を上回り、草丈の伸長が平年と比べて、やや停滞気味であるものの、移植後70日調査では茎数は平年比106%、葉位は平年差0.8、風乾重は平年比121%となった。葉色は淡く推移し、穂肥施用後もその傾向が続いている。移植後70日時点の幼穂長は3.2cm（平年値：2.2cm）、稈長は15.0cm（平年値：13.0cm）と平年を上回っている。「彩のかがやき」は感光性が高く、幼穂形成開始時期の年次変動は少ないものの、他の品種同様に幼穂形成開始後から出穂期までの幼穂の発達は気温の影響を受ける。気象庁が7月31日に発表した関東甲信地方の向こう1か月予報の気温は平年より高い見込みから、出穂期は平年（8月12日）より早まると予想される。

ウ 普通期栽培（6月25日植 彩のきずな）

移植後から高温多照に経過した影響により、生育は平年を上回って推移し、移植後30日調査では、草丈は平年比106%、茎数は平年比116%、葉位は平年差0.2と旺盛な生育となっている。今後も高温が続くと予想されていることから、出穂期は平年（8月17日）よりやや早まると予想される。

（2）県内全般

早期栽培の生育は草丈、茎数ともほぼ平年並で、葉色はやや淡い傾向であった。出穂期は平年より5日程度早まり、7月末から極早生品種の収穫が始まっている。

早植栽培の生育は草丈、茎数ともほぼ平年並、葉色はやや淡い傾向であった。生育期間を通じ高温であったことから出穂期は平年に比べ早まっている。

普通期栽培では栽培初期から高温となり生育は旺盛となっている。麦あと栽培の一部で土壤還元害（ガスわき）が発生し、初期生育が停滞したことから茎数がやや少ないほ場が散見される。

3 今後の生育予測

（1）気象予測

気象庁が8月7日に発表した1か月予報では、暖かい空気に覆われやすいため平均気温は高い確率が80%となっている。降水量は平年並か少ない見込みである。日照時間は多い見込みである。

7月22日発表の3カ月予報では、9月の天気は数日の周期で変わり、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は高い確率が60%である。

（2）生育予測

ア 早期、早植栽培

早期栽培の登熟は全般的に早まると予想され、登熟期間の短縮に伴い、収穫時期も早まることが見込まれる。また、熊谷気象台の日平均気温は7月14日

以降継続して 27℃を超えており、今後も気温は高いと見込まれるため、白未熟粒などの高温障害の発生が懸念される。

早植栽培も早期栽培と同様に生育は早まると予想され、登熟期間の高温が見込まれることから高温障害の発生が懸念される。

イ 普通期栽培

生育は順調に推移すると見込まれる。出穂期は早まると予想される。

4 今後取るべき技術対策

(1) 早期、早植栽培

ア 水管理

高温障害の発生が懸念されることから水管理に留意する。出穂前後 1 週間は深水管理とする。その後は 3～4 日間隔で湛水と落水を繰り返す間断かん水とし、根の活力維持と地耐力の向上に努める。

ため池を水源とする地域で用水不足が懸念され深水を維持できない場合は、幼穂形成期から出穂 1 週間後までは、日中は田面が露出しない程度の浅水を保つ。さらに用水が不足する場合には、数日に 1 回かん水し、土壌が濡れた状態を維持するよう心掛ける。

玄米品質の低下を招くので落水は基本出穂後 30 日以降とし、その後も高温が継続する場合は走り水程度にかん水する。

台風接近時には深水管理とし、台風通過後のフェーン風が収まったら通常の水管理とする。

イ 穂肥

葉色が著しく低下しているほ場では、追肥施用適期以降でも、窒素成分で 1～2 kg/10 a 程度の追肥を実施し高温障害の軽減を図る。

ウ 病虫害防除

本年は斑点米カメムシ類の発生が多く、多発すると収量・品質に甚大な被害を及ぼすことから、出穂期前後 2 週間はほ場周辺の除草作業を避け、また出穂期を迎える水田では、ほ場をよく観察し、必要に応じて薬剤による防除を徹底する。

イネカメムシに対しては、計 2 回薬剤防除を行う。防除適期は、1 回目は不稔対策として出穂期から穂揃期、2 回目は斑点米対策として出穂期の 8～14 日後である。イネカメムシは移動性が大きいので広域で共同防除を行うことが望ましい。

エ 雑草防除

高温の影響から後発の雑草が散見される。クサネムなどの大型種子の雑草は玄米調製時に選別しにくく、製品に混入すると農産物検査で格落ちの原因となるため収穫前に取り除く。

また、特定外来生物の「ナガエツルノゲイトウ」が県内で発生している。水田内や畦畔に定着すると防除が困難となるため、ほ場の水口周辺を重点に

観察し、早期発見と早期防除を心掛ける。

オ 収穫作業

登熟期間が高温で経過していることから収穫開始が早まると予想される。コンバインや乾燥機の点検・準備を早めに行う。

刈り遅れは着色米や胴割米の発生を助長し外観品質や食味を著しく低下させるため、登熟積算気温を目安に、立毛籾水分が 25%に低下したら速やかに刈り取りを始める。高温登熟年は籾の黄化よりも玄米の成熟が早まることから、帯緑色籾割合が多少高くても早めに刈り始めるよう心がける。

(2) 普通期栽培

ア 水管理

出穂前後各 1 週間は深水管理とする。その後は、間断かん水を行い、根の活力維持と地耐力の向上に努める。ため池を水源とする地域で用水不足が懸念され深水を維持できない場合は幼穂形成期から出穂期 1 週間後まで日中は田面が露出しない程度の浅水を保つ。さらに用水が不足する場合には、数日に 1 回かん水し、土壤が濡れた状態を維持するよう心掛ける。

台風接近時には深水管理とし、台風通過後のフェーン風が収まったら通常の水管理とする。

かけ流しかん水は用水の不足を招き、高温障害を助長する恐れがあるので避ける。

イ 穂肥

葉色が著しく低下しているほ場では、追肥施用適期以降でも、窒素成分で 1～2 kg/10 a 程度の追肥を実施し高温障害の軽減を図る。一発肥料を使用している場合、高温年には通常の穂肥施用時期以降に穂肥分が溶出して葉色が濃くなることはない（中干後の地力窒素発現を除く）ため、穂肥を積極的に施用する。

ウ 病虫害防除

早期、早植栽培地域と同様に斑点米カメムシへの警戒が必要である。ほ場周辺の除草は出穂 2 週間前までに行い斑点米カメムシ類の田への侵入を防ぐ。

出穂前のほ場でもイネカメムシの発生が確認されている。早期、早植栽培に準じて出穂期の防除を行うが、出穂前でも多発している場合には速やかに防除を行う。

いもち病の常発地では高温年でもいもち病が発生するので、葉いもちの発生が見られたほ場では、穂ばらみ期から穂揃い期に穂いもちの防除を行う。紋枯病の発生が多いほ場では、穂ばらみ期から出穂期に防除を心がける。

エ 雑草防除

クサネムなどの雑草種子は調製で除去しにくく、製品に混入すると、農産物検査で格落ちの要因となるので収穫前に取り除く。

解析・考察に用いた具体的数字

1 気象表（熊谷气象台日別測定値から集計）

半旬	平均気温(°C)		最高気温(°C)		最低気温(°C)		降水量(mm)		日照時間(hr)	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
1	28.7	24.6	35.0	29.2	24.6	21.0	5.5	27.8	33.4	19.8
2	30.1	25.2	36.3	30.0	25.9	21.5	95.0	29.8	35.3	20.9
3	25.5	25.7	29.2	30.6	22.5	22.0	20.5	28.7	11.5	22.5
4	28.4	26.2	34.3	31.1	24.1	22.4	2.0	26.6	41.2	24.1
5	30.9	26.7	37.6	31.7	26.5	22.9	2.5	25.0	49.3	25.7
6	30.6	27.3	37.2	32.6	25.6	23.4	0.0	27.6	71.0	33.9
平均	29.1	26.0	35.0	30.9	24.9	22.3	合計 125.5	169.8	241.7	146.0

注) 半旬数値は熊谷地方气象台日別測定値から集計。ただし、月平均・合計は気象台値。

平年値は 1991～2020 年の気象台値。

2 早期栽培（5月1日植 コシヒカリ）

（1）本田生育

移植後 日数	草丈(cm)			茎数(本/株)			葉位(L)			風乾重(g/100本)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年差	本年	平年	平年比
70	90.1	84.0	107	29.3	28.5	103	12.7	12.2	0.5	1296.9	1014.8	128
出穂期	108.4	109.0	99	24.2	23.3	104	13.1	13.2	-0.1	1886.2	1653.4	114

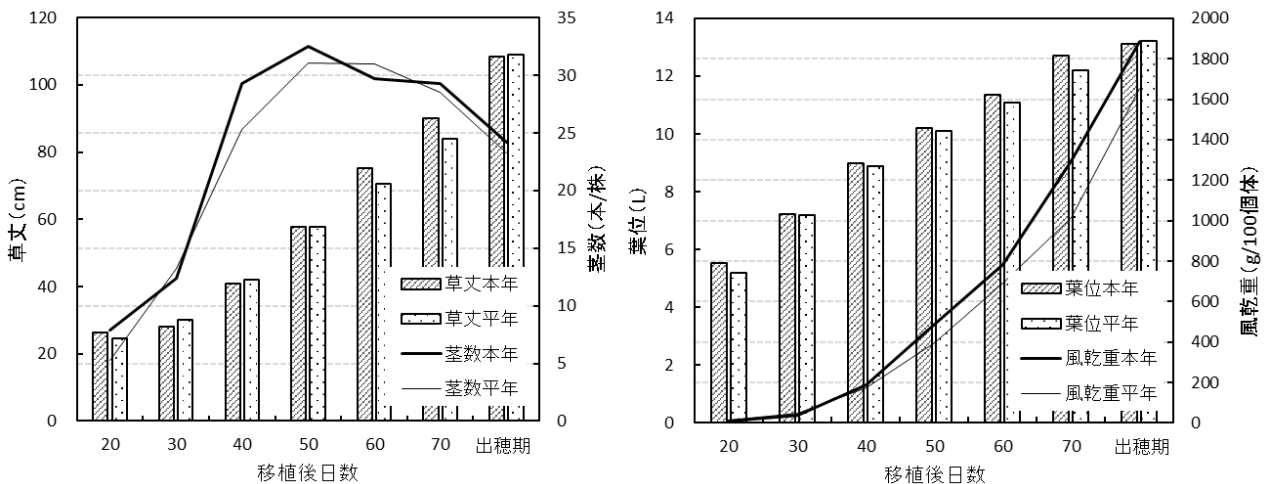
注) 平年値は平成11年～令和6年の平均(H22を除く)。 平年比は%

（2）出穂

出穂始(月日)			出穂期(月日)			穂揃期(月日)		
本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差
7/12	7/20	-8	7/20	7/25	-5	7/23	7/28	-5

注) 平年値は平成11年～令和6年の平均(H22を除く)。

（3）生育経過



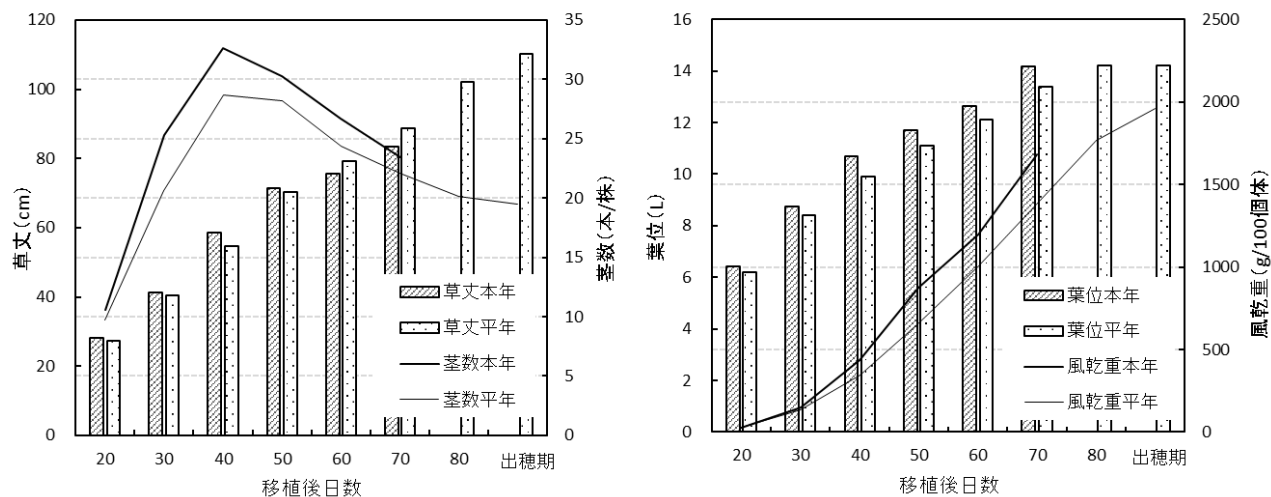
3 早植栽培（5月20日植 彩のかがやき）

（1）本田生育

移植後 日数	草丈(cm)			茎数(本/株)			葉位(L)			風乾重(g/100本)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年差	本年	平年	平年比
50	71.5	70.2	102	30.3	28.2	107	11.7	11.1	0.6	874.0	660.5	132
60	75.7	79.2	96	26.7	24.4	109	12.6	12.1	0.5	1195.6	999.5	120
70	83.5	88.7	94	23.4	22.1	106	14.2	13.4	0.8	1679.4	1385.7	121

注) 平年値は平成12年～令和6年の平均。 平年比は%

（2）生育経過



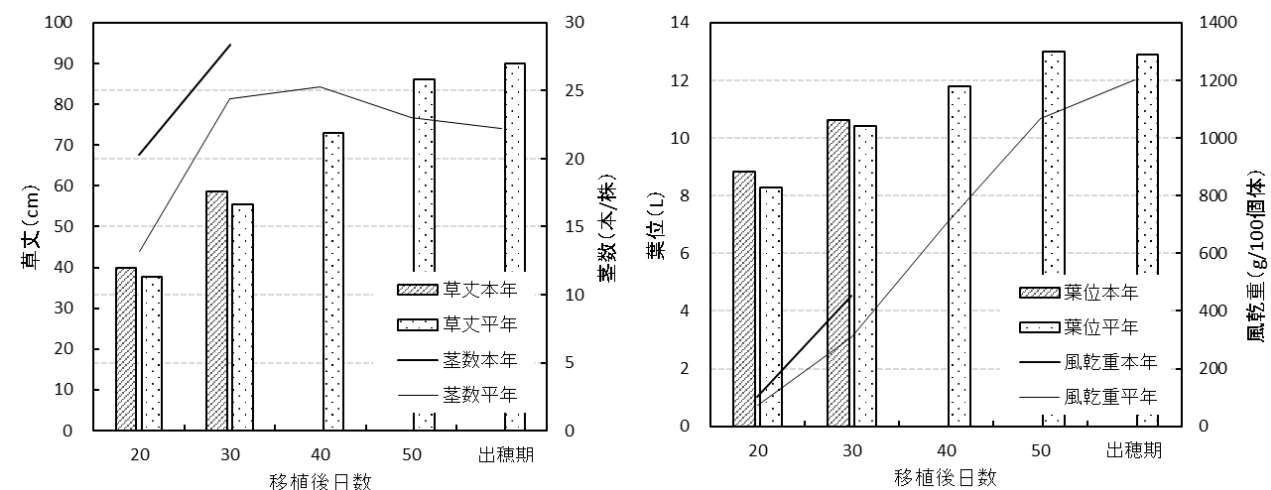
3 普通期栽培（6月25日植 彩のきずな）

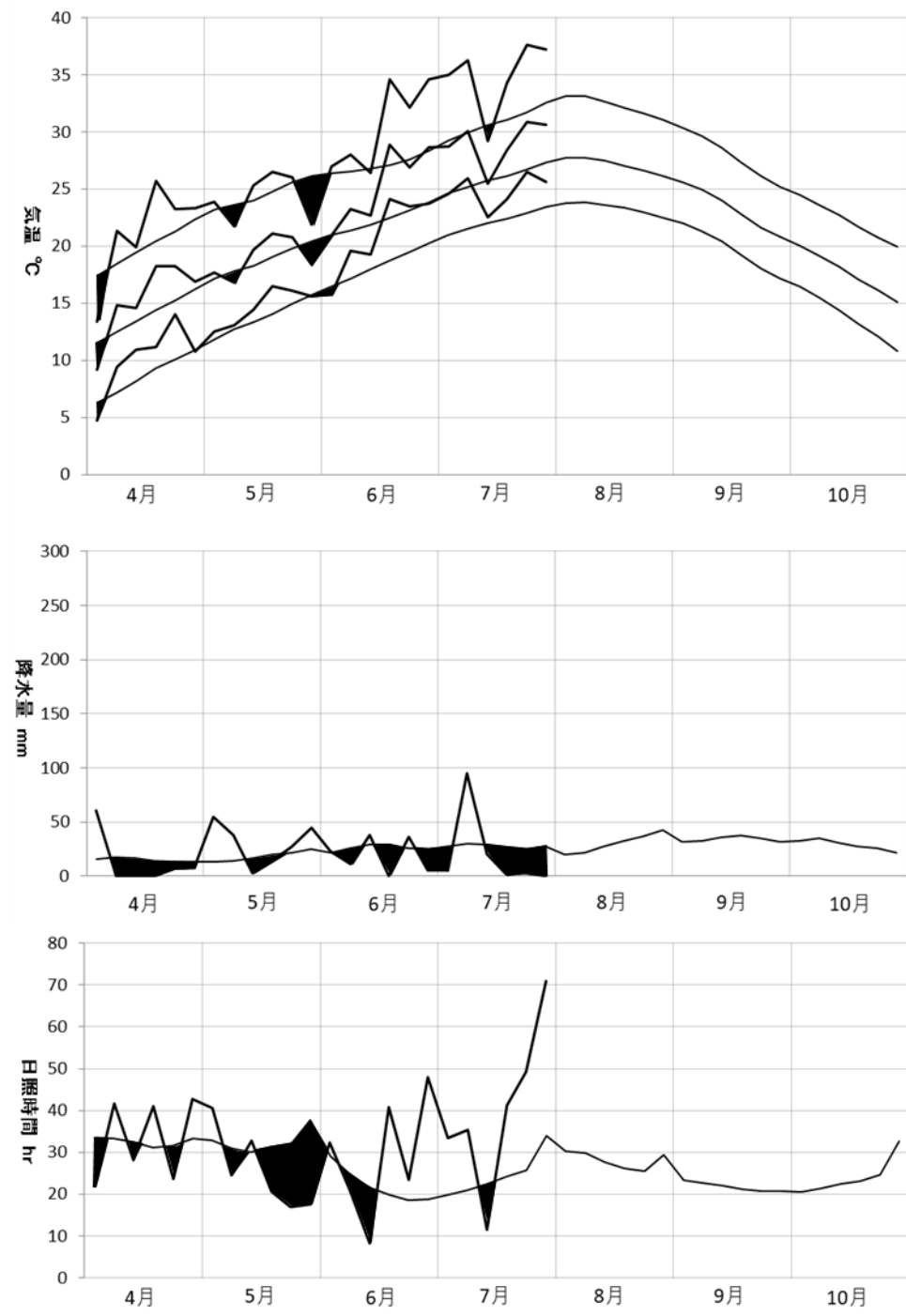
（1）本田生育

移植後 日数	草丈(cm)			茎数(本/株)			葉位(L)			風乾重(g/100本)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年差	本年	平年	平年比
20	39.9	37.7	106	20.3	13.2	154	8.8	8.3	0.5	102.4	71.9	142
30	58.5	55.4	106	28.4	24.4	116	10.6	10.4	0.2	454.0	309.0	147

注) 平年値は平成27年～令和6年の平均。

（2）生育経過





令和7年夏作期間気象図

(熊谷気象台日別測定値から作成)